

書評

亀山郁夫著

『シヨスタコーヴィチ 引き裂かれた栄光』

岩波書店、二〇一八年

大岩 昌子



ロシア革命、世界大戦、スターリン体制など、激動の二〇世紀に翻弄されながらもソ連に大きな足跡を残した作曲家ドミートリ・シヨスタコーヴィチ（一九〇六—一九七五）の人生を余すことなく描ききった、四五〇頁にわたるモノグラフィである。作曲家が紡ぐ音楽の根源とはなにか。著者はこの問いに答えるべく、彼の生きた歴史に深く入りこむ。一九九四年、サンクトペテルブルクでの「白夜祭」で第二次世界大戦中に作曲された交響曲第八番を偶然耳にした著者は、予定調和的な音楽の概念を根本から覆す曲の作りに圧倒され、それまで単なる「御用作曲家」と見なしてきた自らの意識を改める。以後、自らを魅了し続ける作曲家をめぐり、四半世紀にわたって研究してきた集大成が本書である。全体は三部構成で、複雑な作品に込められた秘密を解き明かすため、著者は得意の「謎解き」を行っている。政治的背景に照らして立てられた仮説や推論を近年ロシアで発表された膨大な資料を読み解くことにより検証し解釈する。連続する挑戦的な考察と巻末に付帯する四〇頁以上におよぶ注釈は読者を飽きさせない。

シヨスタコーヴィチは、「音楽ならざる荒唐無稽」と自らのオペラ作品《ムツェンスク郡のマクベス夫人》をソ連共産党中央委員会の機関誌『プラウダ』で批判され、常に粛清される恐怖におびえていたことは周知のところだ。だが一方で、交響曲第二番「一〇月革命に捧げる」は、弱冠二〇歳過ぎで革命

一〇周年の祝賀を依頼された作品であるし、第一回スターリン賞の文学芸術部門で一位を受賞するなど、彼がスターリンに特別、愛された作曲家であることも間違いない。確かにスターリンは粛清を繰り返す暴君だったが、このほか芸術の力を信じ、畏怖していた。だがその死後、指導者となったフルシチョフは芸術に無関心だった。ちなみに、ロシアで上映禁止となった二〇一七年製作の英仏合作映画『スターリンの葬送狂騒曲』では、この対比が滑稽に描写される。皮肉なことに、新しい体制の中、作曲家は徐々に、権力者ではなく自分自身の内面へと向かうことで、自己沈潜の極みともいえるべき、新たな世界を構築することになったと著者は考察する。そんなシヨスタコーヴィチを、作曲家エジソン・デニーソフは「自己中心主義のまぎれもない見本」といい、指揮者イーゴリ・ブラシコフは「驚くばかりに宗教的な人」という表現で形容する。その間に横たわる断絶は外側から見た公人と私人の「分裂」にちがいない。しかしそれは、私人においては単に『白痴』のマイシキンだったという意味ではない。むしろ公人のなかに私人が、私人のなかに公人が忍び込むという複雑な人間的個性にこそ、シヨスタコーヴィチという人間と音楽の謎めいた分裂と、神経症的な魅力の根源が隠されているとする帰結には、先行する評伝とは一線を画す、文学者ならではの著者の使命感を感じずにはいられない。

一人の人間としてソヴィエト社会の要求に音楽で応えたいという、革命一家に生まれ育ったシヨスタコーヴィチの不条理ともいえる倫理観と献身。作曲家への賛美で締めくくられる全編を貫くのは、交響曲第七番第四章を思わせる筆力とともに、「異形の音楽」を奏するシヨスタコーヴィチに対する憧憬という通奏低音であった。二〇世紀の先鋭的音楽への関門としてそびえ立つシヨスタコーヴィチ。二〇一八年に亡くなったロジェストヴエンスキー指揮による演奏をもう一度聴いてみよう。ことによるとこれまでと異なる音楽が響いてくるかもしれない。

なお、同時期に刊行されたソロモン・ヴォルコフ著『シヨスタコーヴィチとスターリン』（慶応義塾大学出版会、亀山郁夫他三名訳）は邦訳に一〇年以上が費やされた大著である。併せてお勧めしたい。